



「今後は品数を増やし、地域に密着した店づくりを目指します」と夢を語る池田さん。

勤先の利尻で、ただ一軒の豆腐屋に通っていましたら、そこで知り合いましたね」。美智子さんは豆腐店の娘さんでした。

池田さんの豆腐に対するひたむきさは、やがて起業へと発展します。好きこそ物の上手なれとはいうものの、豆腐づくりが技術的にも肉体的にも決して楽ではないことを身をもって知る美智子さんのご両親は、当初開業に難色を示しましたが、池田さんの真剣さが伝わり、全面協力してくれることになりました。今では、大学に通う3人の子どもたちも折々に店を手伝います。

「前よりも家族の中で会話が増えたような気がしますね。豆腐づくりは始まったばかりですが、みんなの力を借りながら、気負わずじっくり取り組んでいきたいと思っています」

早朝5時からの仕込み開始は、池田さんにとって、夢がふくらむ毎日の始まりです。

生涯現役！

輝くセカンドライフに向けて

2007年、団塊の世代が二斉に定年を迎える節目の年が近づいています。

石狩市では、'60年代に花川南地区が「新札幌団地」として宅地造成されて以来、団塊世代人口が大幅に増加しました。まさに本市の発展を支えてきたこの世代にとって「定年退職」の言葉は、特別な思いとなって胸に響くのではないのでしょうか。ビジネスの線から退くことへの寂しさ、老いへの不安。その一方で、好きな生き方を選び、やりたいことを思う存分できる期待感。

いま、こうしたさまざまな気持ちと向き合いながらも、よりよい第二の人生を送ろうと自分の可能性を模索し、夢を追い求め続ける人たちが増えています。

一念発起の早期退職 夢の豆腐店を起業



「店を始めたことで、夢がまた一つ広がった」と池田義高さん。

7月8日、花畔に豆腐店「豆楽」をオープンさせた池田義高さん(54)にとつて、定年退職のイメージは、決して明るいものではありませんでした。「亡くなった父親が『定年退職した後は死ぬのを待っているようなものだ』なんて言っていました。それだけは嫌だなあと思っていましたね」

30年近く勤めていた家電販売会社を昨年1月に退職。7年先の定年を待たずに決断したのは、第二の人生を積極的に歩んでいきたいという強い思いからでした。「定年後に家で退屈な

生活を送る自分の姿がどうしても想像できなかった」という池田さんは、40歳を過ぎるころから、「体が動くうちには定年など考えずに働き続けたい」と妻の美智子さんに胸の内を打ち明けます。

第二の人生を意識したとき頭に浮かんだのは、豆腐づくりでした。池田さんは1年のうち300日は豆腐を食べるというほどの豆腐好きで、サラリーマン時代からおいしい豆腐があると聞けば足を運び、美智子さんとの出会いも豆腐が取り持つ縁。「転

花畔に住む宮腰弘嗣さん(67)は、退職を機に伝統陶芸の教室「石狩陶房」を開設し、現在、市内外から通う23人の老若男女が、ここで和気あいあいと陶芸を学んでいます。

そんな今の暮らしがとても充実していると話す宮腰さんは、「教室と言っても営業目的ではないので、むしろ同好会と言ったほうがいいのかも少しれませんね」と笑います。

陶芸との出会いは20年前。当時、新聞社で経理を担当していた宮腰さんは、仕事柄たまってしまうストレスが、作陶を通じてリフレッシュされていることに気が付きました。もともと実家が瀬戸物店だったため、器を眺めるのが好きでしたが、実際に作ってみるとその喜びはまた格別でした。

土と炎が創り出す陶芸の神秘性に魅了された宮腰さんは、定年後は陶芸に打ち込む生活を送ることを目標に定め、本格的な勉強を始めます。

学ぶ側から今では指導する立場になった宮腰さんですが、技術や発想がマンネリ化しないよう日々勉強と、新たな作陶への挑戦が続きます。



「私の持っている知識や技術を多くの人に伝えていきたい」と充実した日々を送る宮腰弘嗣さん。

陶芸教室を開設 人との出会いに充実感



窯の前で仲間たちと語りうるとき、宮腰さんは、「第二の人生は、その一瞬一瞬を大切に、楽しく生きることこそが大事だ」と実感するそうです。

団塊の世代と2007年問題

「団塊の世代」とは堺屋太一さん(作家・経済評論家)が著書の題名としたのが由来で、戦後の第1次ベビーブーム(1947~49年)に生まれた人たちを指しています。この世代の人たちは、他世代に比べ人数が2~5割も多く、その多くが日本の経済成長に寄与してきましたが、まもなく60歳(2007年~)で定年退職を迎えようとしています。その退職後もまた、社会にさまざまな影響を与えることが予想されており、これが「2007年問題」とよばれています。具体的には、企業における労働力不足や技術伝承の問題、退職者と現役世代の比率逆転問題などが懸念される反面、シニア層をターゲットにした趣味や健康関連分野での市場が大きく発展することも予想されるなど、新たなビジネスの台頭も期待されています。